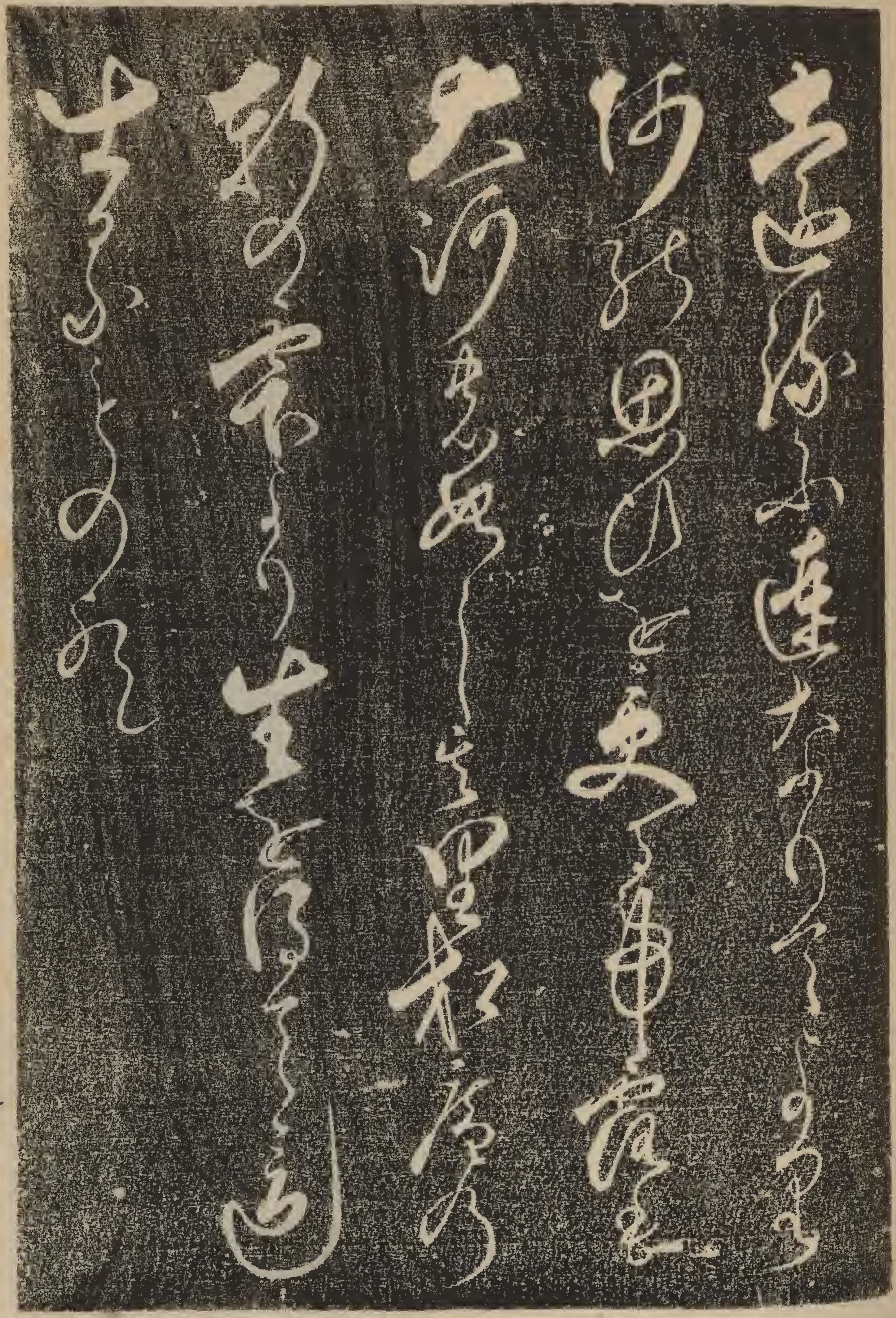
遠州流
挿花表道
下

403



芒花　女郎花
燕尾香　桔梗
瞿麥

坂東氏
一九

一九

濱錦菊

神田氏
一笑

丁子菊
スカレ

鳥海氏
一潮

梅嫌

加賀白菊

田中氏

一沖

葉牡丹

林氏

一秀

彼岸櫻
木瓜
雁足

一命

藜蘆

藤平氏
一延

亥ノ子柳
百本

上州高崎
田中氏
森松庵一郷

蕙花

同所同門　藤野氏
青霄庵一烏

萍蓬草
水ナシ
上毛高崎
森松庵門人 植木氏
青林庵 一誠
青蘆
枯蘆
澤三ッ葉
同所同門 橋本氏
青香高庵 一江

亥ノ子柳
梅嫌
柏槙
馬蘭
小菊
青草庵 一雄
奎岡

濱錦菊

上毛高崎
森松庵門人
小澤 一音

馬蘭

羽州野田
嶺松庵門人
奥山氏 龜溪

水仙

伊藤氏
藤松庵一伊

花菖蒲
山丹

同門人
山本氏一鶯

佛頭菊

藤松庵門人一静
吉澤氏

黄娘菊

同

赤寒菊
貳色

黄娘菊

藤松庵門人
一魚

同門人
伊藤氏

船
一糧

萬年青

羽州山形
嶺松庵門人
丹野氏一遊

芣苡

羽州宮ニ渚沢
嶺松庵門人
小山田氏龜瀧

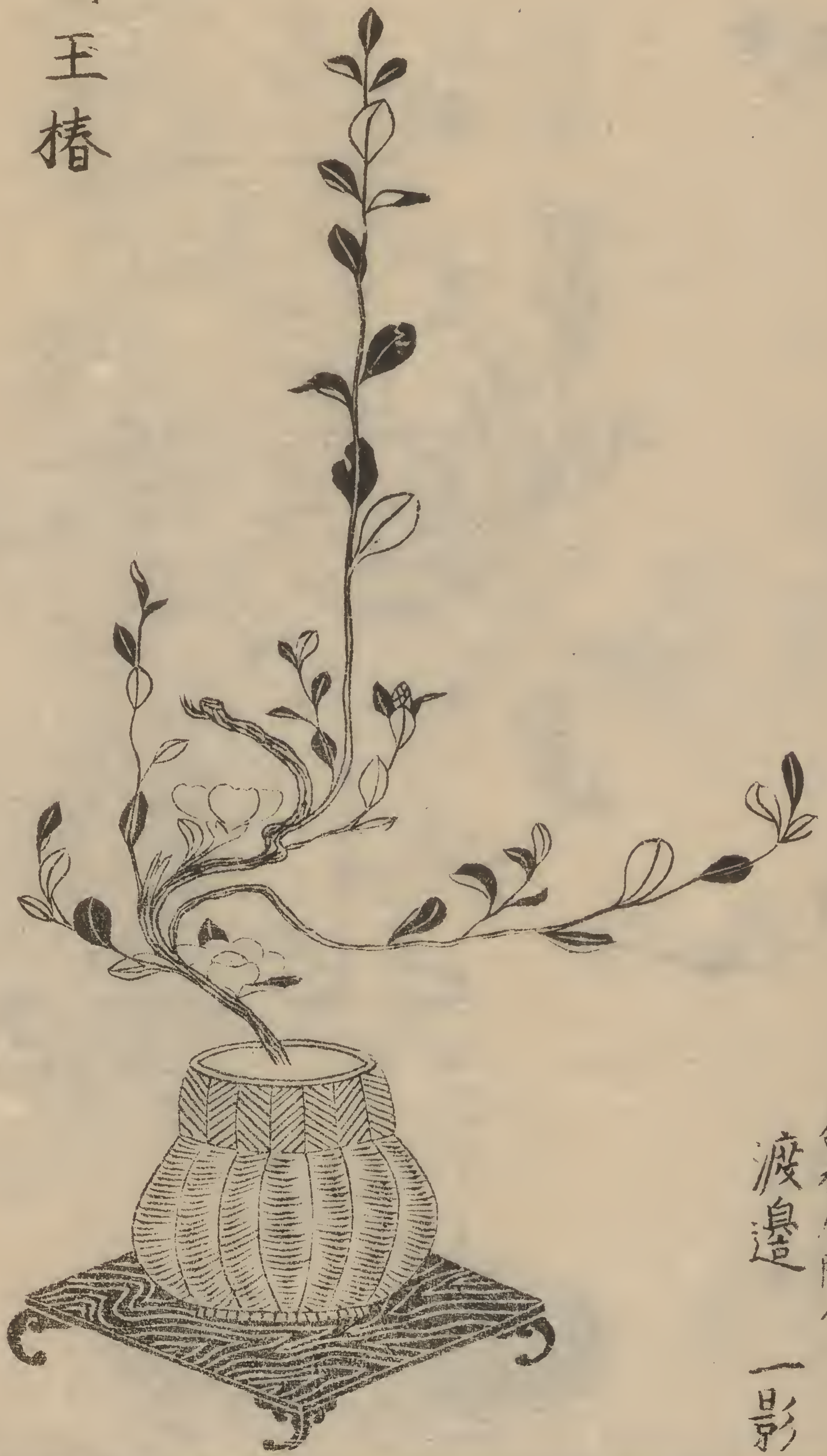
萱草
景松庵一泉

貝母
白桃
海棠
金盞花
同門人
一味
佐野氏
一翰

馬蘭

羽州山野邉
嶺松庵門人
小松氏一鳳

白玉椿



羽州黒沢
嶺松庵門人
渡邉一影

木連
連翹
椿

羽州東根
嶺松庵門人
横尾
亀東

奥白菊
鶴ノ丸菊

羽州山形
長岡氏
一萠

雷電菊

蘿松庵一峨
土屋氏

水仙 五元
土屋氏
蘿蒽庵一机

宝之市菊
燕子花
蘿松庵門人
一尾女
志賀氏
一糸女

初學心法

孤蓬庵宗甫君をもて當流の元祖として御諱ハ政一と稱し給ふ故に其流を酌人ハ一の字を表德に用ることなりしかるに就中授受の正流を得給ひし諸先哲ハ右に記しおけるなり近来挿花ハ業とする人徒に一の字を受る事を知て先哲の諱ハ知ても要なしとして其稱を冒して恭敬を失ふ者多し今是に若志ありて襲もつていふ是亦尾籠の甚敷ものなり我門葉に遊ばん人ハよく／＼こゝろうへし

無ことなり
挿華は草木の天然を失ふて其性にかなはさるにて
穂茶し人の眼を悦はしむ先師傳来の法として
得てしるへりぬき持は截さたる庵号一号と用ひける
然るへし家をたてゝ世人にかくことにあらす
本意なきことなり世に師門を蔑如し邪流
先哲に得て猶庵号を稱し私に流儀をたてゝ
人を欺き世人を又謟つされて故師を忘却し侍る人
中興にあたる人もなきなり其の師の庵号を表徳

其儘受し第二代の師となる類もあるなり
風雅の道にありては殊にいやしむへき事也醫業に
扁鵲あり射術に小羿あり又冶工の類にも同名の
龍泉の例是多しされとも詩歌連俳茶事には
これは師の名を襲名の例我いまた是をきかす
一壽の傳なるのみ　宗甫君の流なりの傳は
たゝむかしは流祖の名字謚命日に至るまて皆知らぬ
甘心なと法とも常にして是遠枝といへとも
先師の恩を忘れさるなり　如斯なるへき儀は

業尊らしハ
道ハ古今なく業る新舊ゆゑハ常なり徒らに
古きを好て時宜を斟酌せざるハ死法なり古きを
本として時宜をよりて轉化する是を活法といふ
花配りのことハ木茎を剪て三叉を作り瓶中に
施して根を固むることを舊しきれど是として皆固
なりしむることにて得らるゝ法は三年學なく
其業を得らるゝ人多し一壽是を憂の百有して
是を考へはべるにまのあたり文化辛未のとし思ひ

得ることならず其術ハ茎を裁割し中ほどを削りて
藥研の形ちなし試に瓶中に配りて花枝を挿むるに
心の儘に固め得らし志あるまゝ物接をハ是を藥研配と
名付て人にしめさむとするに世の人のしらざれバかへりて
譏笑して卑なりて真を失めし草を前すまじとく
ゆるされあらり斯て此法を用る人其便ありて流ある
あつく術の達し安き法は當流はさらなり他流
用る此傳を用る事となきにあらず只此一事一壽此
道にあひていさゝか功を後世に遺せしとおもふ
謂庵

○草木の鑑寡にて其性によりて大なるひあり又花壽を保ちしむる秘事甚傳是多しといへとも今こゝにあらはすも揃ゆる風致余り自得せし梗概を記して條目を左にしるすのみ

一草木共最初に真を立る事　一蓮花萍蓬草即揃并水あしらひ揃事

一竹の枝を養ふ并割竹一節切竹水あしらひの事　一燕子花水あしらひの事

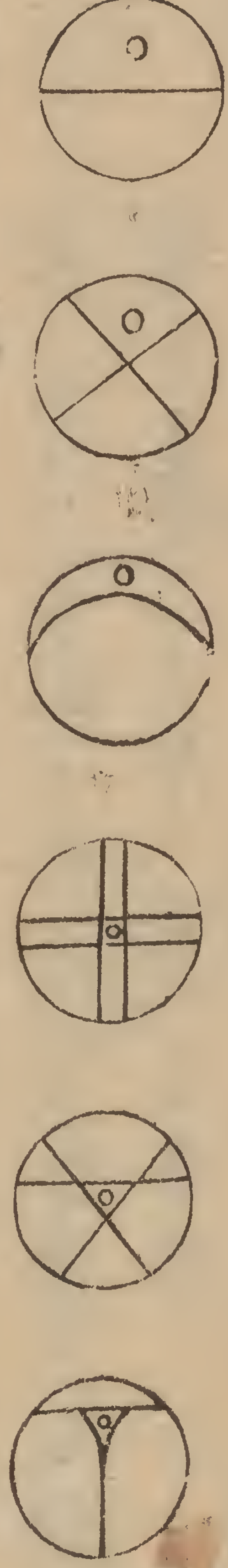
一水仙の花扱出して遣ふ事　一同葉平に揉る并四枚葉別々に遣ふ事

一水仙獼猴立并内の葉を長く遣ふ事

一馬蘭逆真を立る并小葉を遣ふ事

一草木花葉枝不相應の事

花配ニ之事



花配ハ諸先哲の工夫によりて各々名付るなりといへとも記されて傳ふるを受て知る無し只予自得せしところの花配を嘲りたまはす諸君得意のために大昔よりの花配の数圖して看に供ふのみ

流祖遠州公の三股配ハ寛永年中に工夫ありしせたまふ

木の三股を切て細口物に重ねさせて用る所なり

九木を割て用ゆ遣ふ事ハ安永の頃春秋軒一葉君より
始まる處なり是まて諸君も我も専ら用ゆ所なり
予ゟ自得せし處の薬研配ハ文化の頃始る最初より
諸君の笑ひを受しといへとも今ハ識り人く又ハ他流より
専ら用る事となりぬ是而已なし各々の門葉を
持るも何れも一専の工夫せしと用るといへとも
書れハ夫ゟ工夫せし抔と言なりして専ら
用るなりされと諸君一人も多く用ひたまふを
我も喜ひ思ふる而已

里松庵誌

此二百年有余の間世の中の門下多く
横名をかけしをあつめ拙者も古き處をおり
うつしを遊て近来まで通天すゝみしもさきに其の
何れ我もその條理に写しいさゝか思
河原に春秋庵の友人のあらはきまた
まつ弟の處をきちんとまとめ大方見
勧め漏りなく加へぬりたまふ

錦のしすゝき番

于時文政七年

甲申初夏

東都浅草山谷住

里松庵一壽撰

龍潭畫

再白

菊一百拾五輪

水仙五拾本

馬蘭百枚

此圖後篇ニ出ス